

愛知大学短期大学部女声合唱団の思い出

愛知大学文学部文学科 昭和 62 年卒 久野 かおる

はじめに

昨年（平成 28 年）11 月に、思いがけず愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー、愛知大学名誉教授でいらっしゃる藤田佳久先生にお目にかかった。その時、先生との話の中で、私が学生時代に女声合唱団に所属し、活動していたことをお話しすることができた。また、12 月には、私が生まれた 1964 年（昭和 39 年）に男声合唱団、女声合唱団で活動していらっしゃった大先輩の皆様にお会いし、当時の写真を見せていただきながら、どのような活動をしていらっしゃったのか伺う機会を得た。

先輩がたのお話は、私にとって実に衝撃的かつ刺激的なものであった。何と素晴らしい活動をされていたのだろう。何と素敵なお先輩がたが礎を築いてくださったのだろう。今、先輩がたが学生時代を振り返り、何らかの形で男声合唱団、女声合唱団の活動をまとめようとしていらっしゃる。〈資料 1 参照〉私にも何かできることがあるのではないかな。

2017 年（平成 29 年）は、私が愛知大学を卒業してちょうど 30 年が経過する年である。大学卒業後も近い間だけではあるが、女声合唱団のつながりはずっと続いている。残念ながら、女声合唱団は存続していないようだが、私たち後輩は確かに先輩がたの熱い思いを引き継ぎ、着実に活動をしていた。今こそ振り返る時だと思った。

拙稿は私の記憶と印象によるところが大きく、女声合唱団関係者の皆様のご叱責を受けることは承知しているが、皆様の記憶が呼び起こされるきっかけにでもなれば幸いである。

1. 入団動機と活動内容

豊橋勤労福祉会館（現在のアイプラザ豊橋）での入学式が終わり、大学の門を入ると、各サークルがかなり活発に新入生の勧誘をしていた。偶然、中学校の同級生も同じ科に入学したので、一人ぼっちではなかったが、右も左もわからない私たちに声をかけてくださった「山旅同好会」の先輩は、どの講義がいいだの、どの先生がいいだのと、何度も時間割の組み立てを教えてくださいました。後から振り返っても、女声合唱団の勧誘は一切なかった。

友人の高校時代の同級生が法学部に入学していて、彼は私にきっぱりと「男声合唱団」に入ると言った。その時は、「合唱団？ふ～ん」と思った程度だった。それから何日か後、履修登録も無事終了し、友人が授業後、女声合唱団の見学に行くと言ったので、ついていくことにした。

短大 3 号館（現在の 7 号館）1 階の教室にアップライトのピアノが置いてあり、女声合

唱団の先輩たちが発声練習をしていた。自分から飛び込んで見学に来た私たちを先輩たちは笑顔で温かく迎え、すぐに発声の指導をしてくれた。私たちの他にも参加していた1年生がいた。いわきん、たけうつつあん、よっちゃん。この後、生涯の仲間となる同期3人との出会いである。ちなみに、一緒に見学した友人は、「法社会学研究会」に入り、演奏会に来てくれる良き理解者となった。

さて、女声合唱団の活動は、以下のようであった。

- ①練習日：月曜日 16時30分～19時（技術顧問田辺秀治先生のご指導あり）
水曜日 16時30分～18時30分（ヴォイストレーナー吉田憲子先生のご指導あり）
木曜日 13時30分～15時30分

- ②主な活動内容：6月 文芸連フェスティバル
8月 夏合宿（4泊5日）
11月 大学祭（歌声喫茶）
12月 定期演奏会
2月 三女声ジョイントコンサート

短期大学部女声合唱団と言いながら、短期大学部の先輩は団長の1名のみで、全員で10数名の小さな合唱団だった。合唱経験のない私が、なぜ入団しようと思ったのか。

そこにいた先輩たちは、学部も学科も様々で、教員志望の先輩、司書・司書教諭課程を受講している先輩、短大2年目で就職活動をする団長など、各々が自立し、お互いの思いを出し合って、まっすぐ前に向かっていく人たちだと感じた。私と歳が変わらない先輩たちが、とにかく大人で輝いて見えた。歌うことが好きだったし、この輪の中に入ったら、楽しそうだなと思った。

先輩たちがみな、アルバイトをしていたこと、授業最優先で活動していたこと、私自身も教員志望で、合唱は将来教員としても役に立つと思ったことも入団を決めた理由である。その時は、まさか体育会並にキツイ活動が始まろうとは思ってもいなかった。

2. 「梢の歌」

「愛知大学学生歌」はかつて女声合唱団の指導者でもいらっしゃった山田昌弘先生が作曲された勇猛果敢な勢いのある歌で、入学式で男声合唱団の演奏を初めて聞いた時には、「何なの、この妙にリズムカルな歌は」と驚いた。

短期大学部の学生歌「梢の歌」の作詞者は、詩人丸山薫先生である。入団してすぐに練習した歌だ。「愛知大学学生歌」とは曲想がまったく異なり、まず前奏のピアノ伴奏が優雅で、流れるように始まる歌詞には大学名も入っていない。これも初めて聞いた時には、「何なの、この歌は。さすが丸山薫」と感心したものである。当時、短期大学部の卒業式は大学内の教室で行われており、女声合唱団が「梢の歌」を歌っていた。今もナーコ先輩のなめらかなピアノ伴奏が蘇る。

6月の文芸連フェスティバルに向け、他の曲の練習も始まった。先輩たちが選曲した「流浪の民」は難しかった。合唱経験のない私は、声質からアルト担当となり、左にマキコ先輩、右にタケ先輩のサンドイッチの立ち位置で歌っていた。音を外しては、左から右から「くのちゃん！」と叱られながら、立ちっぱなしの練習は、けっこう腰にきた。指揮者のユキミ先輩も私が間違えると、「こらっ！」という美しい表情で見つめていた。それでも他のパートの声を意識しながら、タケ先輩の声を確認して、大きい声で歌うことは快感だった。1年生の時は、いつも先輩たちがそばにいてくれて、甘えたことを言っても許されたので、幸せな時間だったと思う。

文芸連フェスティバルでの演奏が1年生にとっては、初めて人前で歌うお披露目となった。当時の学生会館の2階に古ぼけた舞台と客席、グランドピアノに照明もあり、聴衆は男声合唱団と友人たちであった。それなりに緊張して歌ったのを覚えている。それにしても先輩たちは男声合唱団に人気があった。先輩たちの、今で言う男前の性格と澁刺とした笑顔は魅力があったのだろう。

3. 夏合宿

私が女声合唱団で活動したのは、1年生から3年生までの3年間。2年生からは教職課程と司書・司書教諭課程も履修していたので、かなりタイトな日々を送っていた。4年目は教員採用試験と卒業論文に集中したいと言って、退団した。

1年生の夏合宿は、岐阜県の王滝村、2年生は三重県の二見、3年生は長野県の白樺湖まで、いずれも4泊5日で出かけた。夏合宿の目的は、12月の定期演奏会に向けての練習。

1年生の夏合宿の感想は、ずばり「信じられない！」であった。信じられないことに、朝から晩までとにかく練習、練習。昼ごはんも宿で頂戴していたから、一歩も外に出ることなく、とにかく練習、練習。先輩たちは平気な顔して、練習、練習。「合唱団って、体育会だわ」と本気で恨めしかった。夜のおしゃべりもそこそこに、川のせせらぎを聞きながら、ぐったりと就寝。朝起きたら、よっちゃんが部屋の押し入れから出てきて、「おはよう」と言うから、みんなで目をぱちくりしたことも覚えている。

2年生になると、自分たちが核となって動くことになった。女声合唱団のスタッフは、①団長、②副団長、③渉外、④内渉・会計、⑤三女声ジョイント委員であったが、私は④と⑤を担当するよう先輩たちから話があった。どの担当が適切か、先輩たちは1年生を見守り、指導しながら、活動を進めていたのである。

2年生の夏合宿では、自分が旅行社と交渉し、宿から交通機関まで手配したこともあり、かなり気が張っていた。何しろ豊橋からそれほど遠くなく、宿にピアノがあつて、朝から晩まで練習が可能な場所が条件であったし、先輩と後輩のサンドイッチという立場になったわけだから、全員に対しての責任も感じていた。

あいかわらず朝から晩まで練習漬けで、宿の女将さんもお近所の皆様も、「本当に歌ってるねえ。」と呆れるほどだった。合宿の3日目だったか、台風が三重県に上陸し、宿の女将さんたちがあわてて雨戸をばたばた閉めている時にも、「すみません」と言いつつ練習していた。雨戸の外から、びゅうびゅうと風の音がし、雨が戸をたたきつけていた。「この状況でも練習を止めない！」しかし、2年目ともなると、1年生の時ほど疲れていない自分に驚

いた。夜のおしゃべりにも花が咲き、外で花火を楽しむ余裕もあった。〈資料 2 参照〉

3 年生の夏合宿では、4 年生になった先輩たちが参加せず、自分たちが上級生となり、かわいい後輩たちとどう接するか、どう合宿を乗り切るか、今ひとつ踏ん切りがつかないままとなった。3 回目の合宿となる私たちと、初めて合宿に参加した 1 年生の思いがかみ合わず、1 年生の疲れは 3 日目にピークに達し、練習だけではだめだ、練習を忘れて、思い切って外で遊ぶ日も必要だと知った。〈資料 3 参照〉

4. 歌声喫茶

豊橋校舎では、毎年、10 月末から 11 月の初めに大学祭が行われていた。私たち女声合唱団も大学祭の催しとして、短大 3 号館（現在の 7 号館）の 1 階通路で「歌声喫茶」を開いていた。飲み物やピザトーストなどを提供しつつ、ピアノ伴奏に合わせて、私たちの歌を聞いていただくお店である。男声合唱団のメンバーも参加し、歌う楽しい場面もあった。〈資料 4・5 参照〉

実施日時、場所の届け出、また食べ物の提供については、事前に保健所の検査をパスしなければならず、歌の練習も含めて、準備から片づけまで大変なイベントであったが、みんなで大いに楽しむことができた。

大学祭は、非日常的であった。大勢の人々が大学内を行き交い、知らない者同士が気軽に声をかけたり、はしゃいだり。祭りの後は、まるで何もなかったかのような顔をしているのがおかしかった。

5. 定期演奏会

12 月の定期演奏会で何を歌うのか、技術顧問の田辺秀治先生（桜丘高等学校音楽科教諭）と学生指揮者は毎年、頭を痛めたことだろう。毎回、なかなかバラエティに富んだ選曲で、中でも「落葉松」は、私たちが感情移入するには人生経験が未熟で、田辺先生のご期待には沿えなかったと思う。

ピアノ伴奏者は、田辺先生が素敵な先生に依頼してくださった。田辺先生にもヴォイストレーナーの吉田憲子先生にも、学生の身分では寸志程度しか稽古代をお渡しできなかったのだが、常に私たちを励まし、応援してくださったおかげで、定期演奏会を実施することができた。

演奏会が近づくにつれ、田辺先生の練習に熱が入るのもしかたがなかったが、自宅から通学していた私などは、19 時 2 分の渥美線に向かって猛ダッシュすることも度々で、実に失礼なことをしていたと思う。

定期演奏会の会場は、豊橋駅前文化ホール（豊橋駅前大通開発ビル 10 階）。狭いホールなので、舞台と客席が近く、アットホームな雰囲気でも演奏することができた。

定期演奏会を開くにあたっては、①会場取り、②パンフレット、チラシ、チケットの作成、③パンフレットの広告取り、④情宣（他大学合唱団への宣伝活動）、⑤日本音楽著作権協会への申請、⑥演奏録音の手配、⑦男声合唱団（演奏会当日のお手伝い）との打ち合わ

せなど、ミーティングを重ねて各自が分担しながら動いた。パンフレットやチラシのデザインは、美術センスのあるベイク先輩のイラストに負うところが大きかった。〈資料 6 参照〉

パンフレットの広告取りは本当に疲れた。夏休みを利用して、汗だくで豊橋の商店街を歩き回り、前年のつてを頼って広告（出資）を依頼する。まさに飛び込み営業だ。快く賛同し、広告掲載を承諾してくださった時には、涙が出るほどうれしかった。心底ありがたいことだと思った。今思えば、10人ちょっとのメンバーでよくあれだけの活動ができたものだと思う。

演奏会当日は朝から会場に入り、練習とグネプロ（本番と同様の流れ。照明、音響も確認）。田辺先生が「ブルーレディーに紅いバラ」の曲に合わせて、休憩時間にわざわざ真っ赤なバラの刺繍があしらわれたネクタイを買ってこられたことをみんなは覚えているだろうか。私は先輩に化粧をお願いして、本番を迎えた。

演奏会本番はとにかく必死で歌った。暗譜なので、間違えないよう、みんなの声を聞くよう努力した。あんなに練習に時間をかけたのに、本番はいつもあつという間にロビーコールを迎える。これこそ合唱の醍醐味。みんなでやり切った感は言葉にできない。〈資料 7・8 参照〉

女声合唱団の顧問は、三浦八千代先生で、先生は演奏会には必ずご祝儀を持って、駆けつけてくださった。ロビーで温かい拍手を送ってくださっている先生の笑顔を見ては、「ありがとうございます」と心で叫んでいた。後に三浦先生から伺ったことだが、先生は普段の私たちの練習を外からご覧になり、敢えて声はかけず、「よくやってるわね」と見守ってくださったとのこと。（資料 9 参照）

当然、打ち上げも盛り上がる。しかし、まじめな私たちは渥美線小池駅のそばにある旅館でまず反省会。それから深夜、皆様から頂いたお菓子やケーキを食べながら、ガールトーク。まさに女子会。忘れられない一夜を過ごし、翌朝、大学のサークル室（現在は梢風館の場所）に荷物を運び込んでいた。

当時の演奏会の衣装は、白のブラウスに黒または白のロングスカート。私の場合、スカートは母が縫ってくれたもので、今も私の部屋にある。

6. ジョイントコンサート

毎年2月に、愛知学泉大学合唱団、岡崎女子短期大学合唱団と合同で、「Gakusen Aidai Okatan 三女声 Joint Concert」を開いていた。他には、名城大学女声合唱団、愛知学院大学女声合唱団と演奏する機会もあった。〈資料 10・11 参照〉

ジョイントコンサートの醍醐味は、大勢で歌えること。日ごろ、少人数で歌っている私たちにとって、50人もの人数で歌うことは、音の大きさも強弱も迫力があり、実に面白い経験ができた。合同ステージの指揮は、各団技術顧問の先生がたが持ち回りでされたので、選曲にも指揮にも先生がたの色合いがあって、勉強になった。

ただ、定期演奏会と同様、準備から打ち上げに至るまでの道のりは大変で、練習も岡崎へ行ったり、碧海桜井へ行ったり、なかなかハードであった。もちろん合宿もした。合宿先の「美合青年の家」（現在、愛知県青年の家）は、入校式、国旗掲揚、夕べの集い、朝の

集いなどがあり、時間の規律も厳しかった。私たちは、とにかく練習、練習。よくこれだけ歌えるわと思うほど練習した。

岡崎で女子だけの合同コンパも開いた。岡短に、中森明菜の振り付けが得意なメンバーがいて、真剣そのもので何曲も踊ってくれて、一気に交流が深まったことを記憶している。

私が2年生の時には、大胆にも名古屋市民会館中ホール（現在の日本特殊陶業市民会館ビレッジホール）で歌いたいと言い出し、各団の先生がたを驚かせてしまった。若気の至りともいえるべきか、ノリと勢いで実現してしまったのである。

7. おわりに

長きにわたり女声合唱団の顧問をしてくださった三浦八千代先生には、在学中も卒業後も、温かく見守ってくださったことに心より感謝している。三浦先生は本当に音楽がお好きだったのだと思う。特に私は文学専攻科修了後、短期大学部留学生別科開設当初から非常勤講師として17年間もお世話になり、三浦先生には付かず離れずご指導を賜った。

今だから言えることかもしれないが、私は女声合唱団の活動から多くのことを学んだ。パソコンも携帯電話もなかった時代、サークル室や帰りの電車や仲間の部屋でいろいろな話をした。授業のこと、レポートのこと、卒論のこと、就職試験のこと、アルバイトのこと、そして恋のこと。

傾聴、共感、人とのつながり、コミュニケーション技術、組織運営、交渉、お金のやり繰りなどなど。団員が少なかったからこそ、一人ひとりの責任に負うところが大きく、時にはぶつかり合い、協力しあい、成長できたのだ。

12月の定期演奏会の後、愛知大学短期大学部女声合唱団としてホリデイ・インホテル、豊橋グランドホテルのクリスマスディナーショーの前座で歌うアルバイトをさせていただいたことも貴重な経験である。

愛知大学を卒業された皆様も、多かれ少なかれ学生時代を振り返ることがあるだろう。私は、今も「愛知大学」というつながりの中にいられることに感謝し、歴史ある女声合唱団で活動していたことを誇りに思っている。

久野 かおる（くの かおる）

昭和62年 愛知大学文学部文学科卒業

昭和63年 愛知大学文学専攻科修了

平成10年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース修士課程修了

平成13年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース博士課程満期退学

平成29年現在 学校法人茶屋四郎次郎記念学園 東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科主任講師

<資料1>
資料展示会のチラシ
(2017年3月開催)



<資料2> 夏合宿で花火を楽しむ(1984年)



<資料3> 夏合宿で仲良く撮影(1985年)



<資料4> 歌声喫茶でメンバーと



<資料5> 歌声喫茶に男声合唱団も参加



<資料6> 1983年～1987年 定期演奏会のパンフレット（写真左）・ジョイントコンサートのパンフレットとチラシ（写真右）



<資料7> 1983年12月18日 定期演奏会（指揮：田辺秀治先生）



FUJICOLOR HR 84

定期演奏会終了後 →

<資料9> 顧問：三浦八千代先生（写真中央）と4年生の送別会（追い出しコンパ）



FUJICOLOR HR 85



FUJICOLOR HR 84

<資料 10> 「Gakusen Aidai Okatan 三女声 Joint Concert」(1985年2月27日)



<資料 11> 名城大学女声合唱団・愛知学院大学女声合唱団とジョイントコンサート
(1984年1月10日)

